「はぁ～っ、ダメだよ、こんなこと・・・もうやめなきゃ」
その部屋には流れるような黒髪の少女が一人、姿見に向かって立ちすくんでいた。ぱっちりとした瞳に控え目な鼻、可愛らしい童顔に比して肉体は成熟しつつある。それがはっきりと分かるのは、いま彼女が全裸の姿であるからだ。膝下までの紺ソックスを除き、どういう理由かその少女 ―― 坂下栞は、ふっくらとした生白い素肌を外気に晒している。
「私、どんどん変態になっちゃうよ・・・あ、あ、んっ・・・！」
興奮しているのか、豊乳の先端で固く尖った乳首を、自らの指で摘んではビクビクっと身体を震わせる。薄い繁みに覆われた股間へ指先を潜らせては蕩けたチーズのように熱い秘唇を刺激する。
「はぁぁっ・・・早く、しないと・・・お兄ちゃん、帰って来ちゃう」
しばらく快楽を貪っていた栞は、一段落したところで四股を踏むように両足を開き、背後のベッドに向けて丸尻を思い切り突き出した。そこへしなやかな指先が伸びてきて、肛門を露出すべく左右の方向に皮膚が引き延ばされる。
「イヤ・・・見ないで・・・お兄ちゃん・・・栞がクソするとこ、見ないで・・・」
あえて下品な言葉を口にすることで興奮を高めているのか、可憐な少女は耳までを赤く染め始めていた。今や露わとなった美肛は皺の周辺を盛り上げて内部に潜むものの重量を感じさせる。どうやら栞はベッドの上に置かれた容器、丁度腰の高さにあるポリエチレンのタッパーに向け、器用にも排便を試みようとしているらしかった。
「んっ、出る・・・んぅっ・・・」
プチ、プチ、ブゥゥゥッ・・・プチッ、プチッ・・・
肛肉を震わせてガスを放出し、黄色く濁った空気の中へさらに濃密な臭いの元を生み出し始める。米や豆、乳製品やカボチャをたっぷりと採り、三日三晩腸内で練り上げた栞の大便は、彼女を愛して止まぬ沙理や愛に言わせれば、蒸かし芋にも似た馨しい匂いを漂わせるらしい。
「は、ぁ、ぁ・・・私、こんなところで・・・んむっ・・・お兄ちゃんのベッドで・・・ウンコしてる・・・」
ミチッ、ミチッ、プッ、プスーッ・・・ミチ、ミチ、ミチ・・・
肛門粘膜を裏返しながら押し出されてくる便塊は固く、長く伸びるに連れ千切れることも無くタッパーに折り畳まれて行く。栞もガニ股をくねらせて、尻からぶら下がる一本糞をはみ出さぬよう容器に練り出し続けた。
クチチッ・・・ブボッ！・・・ブスッ、ブスッ！
「あぁぁぁ・・・出ちゃった・・・私、お兄ちゃんのベッドにウンコしちゃったぁ、ぁ、」
腹に溜め込んでいた自然便を残らず搾り出せば、食べ盛りの兄が使う大容量弁当容器の隅々までが栞の太糞でみっちりと満たされていた。猛烈な臭気を放つ大便弁当を惚然としばらく見つめた後、やおら我に返った栞はそれに蓋をして幾十にもビニール袋に包み込む。
決して昼に食べようと言うわけではなく、やはりこれも沙理の提案、というよりは命令に従ってのことである。
「はぁ・・・まったく、よくこんな悪魔みたいにバッチイこと思い付くなぁ・・・」
尻を拭いて服を着ながら少し冷静さを取り戻して栞は呟いた。斯くも凄まじい糞弁当を学校に持って行かねばならないのは『しおりんのウンチでお花を育ててみよう！』と言うトンでもないアイディアが多数決で可決されてしまったためである。
もっとも獲得票数は二対一と極めて限定された状況下での結果ではあるが。
「栞」
「お！ お兄ちゃん！ 帰ってたの？」
「あぁ、早いから晩飯買って来たぞ」
「あ・・・うん・・・」
「ほら、新しく出来たカレー屋の。テイクアウトだ」
「・・・カレー」
「しおり～ん、遅かったじゃな～い♪」
たった三人の部活動から何故か栞は抜け出せなくなっている。最早そこは栞を辱め弄ぶだけの邪悪な集団でしか無いのだが、元来がマゾ奴隷気質の彼女が虐められつつ溺愛されれば、それは悦びでしか無いという道理に栞は気付いていない。
「ね、ね、持ってきてくれた？」
「はぁ・・・」
「マジで持ってきたのぉ！？」
「ひ、ひどい！ 持って来いって言ったの、沙理さんたちじゃないですか！」
「ひひひ、ごめーん。しおりんは素直だから好きなのー」
目を輝かせる沙理と愛を前にバッグを探る栞。その顔が徐々に焦り、青ざめて行くのを二人は興味深く見つめている。
「・・・どしたの？」
「ない・・・ない・・・ないんですぅ！」
「落とした？」
「お兄ちゃんが・・・まさかお兄ちゃんが間違えて・・・！」
「ひぇーーーっ！！」
仰け反る愛を尻目に沙理がニヤリと意地悪そうな笑みを浮かべた。数分後、栞はさんさんと日光の射し込む花壇の中で、臀部を剥き出してしゃがみ込むことになる。
「忘れたなら今日の分は今すぐ出して貰わないとねぇ」
「誰か来ちゃいますよぉ、お願いですから、沙理さん・・・中でちゃんとしますから」
「ダーメ」
「とほ～」
自宅での弁当作りは結局無駄となり、改めて公開排泄の覚悟を固める栞。年頃の女の子は良く食べるし彼女もその例外では無い。直腸は既にして再充填された大便に膨らみ、出口が開くに任せ須く排便の息みを促さんとする。
「ん・・・んぅ～っ・・・うむぅっ・・・！」

「はぁん♪ しおりんの息み声ってぇ、いつ聞いても可愛いっ！」
ぷちぷちぷち、ぴちぴち、ぷすっ、くちっ、くちっ・・・
「すんごいぶっといのが出てきてる！ なんかだんだんパワーアップしてるよね」
歪な極太便が右へ左へと捻れながら花壇の土にめり込んで行く。目を閉じて羞恥に耐え、肛門から長々と一本糞を押し出しながら栞は密かに露出の快楽を味わっていた。薄い陰毛に覆われた未熟な性器から淫蕩な汁をじっとりと垂らし、たまに薄目を開いては沙理と愛の視線を確認している。
「あぁ、しおりんのウンチは今日もくさいわ・・・」
「きっとお花も喜んでるよね」
「恥ずかしいっ・・・恥ずかしいのぉっ・・・も、もうイク！ 栞、お外でウンコしてイっちゃうーっ！」

複雑な心境で帰宅した栞を兄は普段通りに迎えた。台所に行くと昨晩、大便を詰めたはずの容器が綺麗に洗い置かれている。
「あ、あの・・・お兄ちゃん・・・あの・・・えと・・・」
「あぁ、栞、いつも悪いからな、今日は自分で洗っておいた」
「え？ あ、そう・・・」
全く不可解な反応で要領を得ない。さすがに栞も糞便が入っていなかったかとは聞けず、あくまでさり気なさを装いつつ言った。
「おかず、どうだった？ 美味しかった？」
「あぁ、美味しかったよ」
むしろ余計に意味が分からなくなって、ついでに空恐ろしくもなり、栞はもう聞くのを止めた。少し顔を赤くして新しい容器と交換し、前のものは自分の部屋に持って行った。
「とほ～・・・におい、取れてないよ・・・」